様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２年　４月　３０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）一般
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２００３０
研究課題名（和文）　山王神道における神仏関係思想の原理に関する倫理学的基礎研究

研究課題名（英文）　Ethical Study on Principle of Thought that relates Kami and Buddha in *Sanno Shinto*

研究代表者　上原　雅文（UEHARA MASAHUMI）
東亜大学・人間科学部・教授

研究成果の概要：まず神と仏の概念及びそれぞれの受容における知の様態について明らかにした。神は、存在を存在たらしめている自然の根源的な威力であり、意識からすれば外部の存在である。人々は、神との融合を求めて儀礼や物語を生み出した。そこに見られるのは、神の威力を部分的に取り込み融合するというプロセスであり、神との出会いの全的な一回性は、部分的な反復性へと変容する。そして感覚も変容し、神の痕跡としての具体的事物・事象の感得が可能になる。そのプロセスで働いている知は、具体的な諸事物・諸事象が時間の中で変容して現存するという語りの様式を持つ、時間的・物語的な知である。聖地の景観も、そこでの神との出会いが物語られることによって意味づけられている。

仏は絶対知を体得した者の意である。その理解においては具体性を欠くにもかかわらず、多くの日本人の理想となった。そして、日本人は、自身の身体を含め、儀礼の道具、経典における文字、読経の音、そして景観など、具体的な諸事物・諸事象の中に、仏の存在に対する実感を求めて、仏という存在を理解しようとしたと言える。このような、具体的な諸事物・諸事象の中に仏の実感を求める知の様態は、上述した神と人との関係様式と類似する。

以上の考察ともに、『耀天記』『渓嵐捨葉集』『山家要略記』等の山王神道に関する諸文献を詳細に読み解くことと日吉神社などの実地調査によって、山王神道における神仏関係思想を原理的に明らかにした。特に、神仏関係思想の構築に当たって働いている物語的・時間的な知の過程、および景観の役割（象徴的・空間的な知の過程）を明らかにした。また、文字や音に関する具体的な知の様態として、象徴的・類似的・比喩的・同音異義的な附会の様式についても、知の原理的な側面から明らかにした。神仏関係思想に見られるこれらの動的な知の様態は、原初的には神信仰において見られるが､仏法の受容と神仏習合過程の中でさらなる展開を見せた。それは、現代にも通じる、具体的な〈感情・欲望〉と抽象的な〈理知〉とを関係させる独特の倫理的知の様態でもある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
１８年度	１，９００，０００	０	１，９００，０００
１９年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２０年度	３００，０００	９０，０００	３９０，０００
年度			
年度			
総　計	２，９００，０００	３００，０００	３，２００，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：山王神道、神、仏、神仏習合、景観、物語

１．研究開始当初の背景

研究代表者・上原は、まず伊藤仁斎など近世儒学の研究を行い、天という超越観念とそれを拠り所として生きる人間存在の構造を解明してきた。しかし、例えば日本儒学に特有の活物的存在論や情念肯定などの倫理観の根底にあるものと、神・仏などの古代以来の超越観念に基づく倫理観との共通性が指摘されている。倫理学としての日本倫理思想史にとって神・仏の研究は欠かせない。のみならず神・仏・天あるいは近代の文明など、日本人が生の拠り所としてきた超越観念に基づく倫理観の根底を構造的に解明することが求められているのである。例えば、相良亨の「おのずから形而上学」は、古代から近現代まで一貫してみられる日本人の伝統的倫理観を対自化しようとしたものである。上原も、相良亨の倫理学的姿勢を受け継ぎつつ、別の視点から伝統的倫理観の対自化を行っている。それは、神・仏の概念及び神仏関係思想の原理を基礎におき、天という超越観念を包括するという視点である。明治の神仏分離で途絶えたにせよ、別の超越的原理である神と仏とを関係させてきた思想は、世界的に見ても希有なありようとされており、日本の倫理思想の底流をなしていると考えられるからである。

倫理学・日本倫理思想史における神・仏の概念研究は、和辻哲郎を嚆矢とする。和辻は仏教における「空」の思想を普遍的な倫理学原理として提示した。神については「不定の神」という概念を提示し、日本人の倫理観の特質を明らかにしたが、しかしそれは「空」の原理に基づいたものであった。和辻倫理学には、日本の神概念は含まれていない。また和辻の仏教理解についても、早くから疑義が提出されている。ましてや、和辻倫理学には神仏関係思想へのまなざしは皆無である。湯浅泰雄が神・仏の概念を深層心理学・歴史心理学的方法を援用して解明したが、倫理学的概念による考察とは言い難い。相良亨の「おのずから形而上学」は、伝統的な超越観念を踏まえた包括的な倫理観の提示であり、倫理学原理の提示でもあった。しかし、ここでも神仏関係思想は埒外におかれている。佐藤正英の「原郷世界」及び「絶対知」概念は、新たな倫理学的な原理の提示であり、日本の神・仏概念研究を大きく前進させた。しかし、ここでもまた、神仏関係思想の原理的解明に至っていない。換言すれば、「原郷世界」と「絶対知」との原理的関係が不明なのである。

研究代表者・上原は、2004 年に『最澄再考―日本仏教の光源―』を上梓し、最澄段階の神・仏概念及び神仏関係思想の原理を解明したが、まだ不十分であり、最澄研究を引き続き行っていた。その中で、山王神道それ自体に関心を抱くようになった。神仏関係思想は、一般的に神仏習合思想と称され、古代から近世にかけて様々な思想が出現している。中でも山王神道は、文献が十分に読み解かれておらず、倫理学・倫理思想史的研究が進んでいない。

日本天台宗は、法華経を中心経典としながらも、禅・菩薩戒・密教・山岳宗教といった幅広い仏教思想・修行形態をあわせもつことから始まり、その後様々な仏教思想の展開を見せる母胎となっている。空海の真言宗が、空海段階で思想的完成を見たことと対照的であり、日本天台宗の中で展開した山王神道は、神・仏の概念においても、また神仏関係思想においても様々なパターンを含みつつ展開しているのである。神・仏の概念及び神仏関係思想の原理研究における題材として、きわめて豊富なのである。

２．研究の目的

2004 年の拙著『最澄再考―日本仏教の光源―』にはじまる最澄研究を引き続き行うとともに、最澄以降の天台宗史・山王神道における神仏関係思想の原理に関する研究を行う。倫理学的原理の研究の目的は、以下の通りである。

１）本研究は、和辻以来提示されてきた神・仏概念それぞれを、〈物そのもの〉〈感情・欲望〉と〈理知〉という観点から捉え直すとともに、神仏を関係させる場面で働く「知の様態」を、新しい倫理学的原理として提示する。

２）倫理学研究において人間の空間的構造の解明は必須である。それは和辻の『風土』を嚆矢とするが、和辻は〈景観〉の分析を行っていない。本研究で比叡山周辺の実地調査を行い、神仏に関係する景観構造を抽出するが、それを人間存在の空間的構造の解明に寄与する成果として提示する。

３）本研究は、佐藤正英の理論に依拠しつつも、より普遍的な原理探求の視点に立ち、相良倫理学をも包摂しようとする意図を持つ。

具体的には、以下の諸点についての解明を目的とする。

１）近世の山王一実神道を視野に入つつも、円仁、円珍、良源、慈遍等が展開させた山王神道研究、及び『耀天記』『渓嵐捨葉集』『山家要略記』等の文献研究を通じて、山王神道における神仏関係思想を原理的に解明する。既にそれらの神仏関係は、本地垂迹などの概念で表面的には整理されているが、表面的整理にとどまらず、神と仏とを関係させる「知の様態」に着目し、とかく牽強付会と見なされがちな教説の根底に働いていた知の様態を、倫理学的な原理の解明という視点から考察する。

　山王神道における神仏関係の理論は、時代によって変化し、荒唐無稽な牽強付会も目立つ。これが、従来の研究において等閑視されてきた理由でもあると考えられる。しかし、その理論的な営みを神（もの神・たま神）と仏（存在の真実相・仏）という２つの外部（４項）と関係しようとする知の様態として捉え直すならば、神仏を関係させる概念は、２つの超越を媒介・象徴する概念として新たな相貌を見せる。別原理・超越の媒介・象徴である故に、牽強付会は避けられない。そしてまた、外部性の保持のために次々と新たな神仏関係が展開されるという動的な知の働きとなる。媒介・象徴としての概念を生む知は、具体と抽象の狭間にある知の様態であり、存在を具体として感性的・情念的に受容する知の働きが神祇信仰にあり、存在を空・無常などの抽象として捉える知の働きが仏教にあるのに対して、それらを止揚した知の様態である。それはまた、〈感情・欲望〉と〈理知〉とを関係させる独特の倫理的知の様態でもある。この神仏関係思想に見られる動的な知の様態を新たな倫理学的原理として解明する。

２）日吉大社々家の祖宇志丸の系列にある中興の祖、祝部行丸の文献・絵図等を読み解き、仏教思想の側からではない神祇信仰の側からの神仏関係思想の原理を解明する。祝部行丸の思想は、山王一実神道に先行する意義を持つとされているが、神祇信仰・儀礼に関わってきた者による、天台宗系統では数少ない神仏関係思想である。そこに働いていた神祇信仰的な「知の様態」を解明する。

　祝部行丸は鎮座由来の物語にこだわっている。ここに働いている知は、物語という知の様態であり、〈理知〉と関係する倫理的知の様態とは異なる、外部との媒介知である。古くは古事記に始まり、神祇信仰と物語的な知は原理的な繋がりを持つと考えられる。古事記などの神話研究も継続しつつ、行丸の文献解読を通じて、神仏関係思想における、物語的な知の様態を解明し、仏教の側の知の様態と比較しつつ、倫理学的原理として解明する。

３）比叡山及び日吉大社周辺の実地調査を行い、その空間的構造（〈景観〉）を、神仏関係の構造という観点から考察する。参考資料として、山王宮曼荼羅や祝部行丸が描いたいくつかの絵図等を用いる。この調査研究において、意味づけられた景観を生み出す「知の様態」を原理的に解明する。

　景観もまた具体と抽象の狭間に働く知の営みが生み出したものである。山王神道の場合、比叡山とその周辺の景観は神仏関係思想を生み出す母胎であったとともに、神仏関係思想を支える役割をなしたと考えられる。神仏関係思想と景観との関係を考察し、景観を生み出す知の様態をも倫理学的原理のひとつとして解明する。さらに、物語と景観における知の様態が相即的であることを解明する。

３．研究の方法

〇平成１８年度

（１）神・仏概念の研究

１）研究内容

・従来行ってきた平安初期までの神・仏研究で不足していた資料を蒐集し、改めて神と仏の概念について整理する。現有の西田長男『日本神道史研究』はひとつの参考資料となる。

・現有の『伝教大師全集』を用いて、真撰・偽撰に注意しつつ、改めて最澄の神仏関係思想における原理を抽出する。偽撰の文献も、最澄に密接に関連した最澄以降の神仏関係資料として扱う。

・山王神道に色濃い密教の仏概念については、現有の『弘法大師空海全集』を読解して整理する。

・仏概念においては、法華経の語る垂迹概念と密教における法身概念とを軸に考察を深め、そのいずれもが神と仏を関係させる原理となっていることの意味を考察する。

２）購入資料

・『大正新脩大蔵経』は近くの梅光学院大学で借り出すことができるので、『国訳一切経』などの国訳経典の充実、及び『大日本仏教全書』の充実を図る。

・また、奈良・平安仏教に関する研究書の充実を図る。

（２）神仏関係思想の原理的解明

１）研究内容

・山王神道における神・仏の概念及び神仏関係の原理を、主に円仁・円珍・良源まで、

時代としては平安末期までの展開を追うことによって考察する。『耀天記』中の「山王事」は平安末期には成立していたとされているため、考察の対象とする。
・中世期の山王神道への展開をにらみつつ、伊勢神道、両部神道との影響関係にも留意する。
２）購入資料
・近世の山王一実神道までの関係資料を含む、天台宗全書 30 冊、續天台宗全書（第 I 期）15 冊、刊行中の續天台宗全書（第 II 期）の諸文献が必要である。
・『神道体系』の購入が必要である。とりわけ、山王神道、日吉大社、伊勢神道、両部神道関係の巻は必須であるが、他の神道思想との比較も考慮するため、できるだけ多くの巻を揃える必要がある。
・『大日本仏教全書』『群書類従』『続群書類従』にも山王神道関係資料が豊富であり、できるだけ購入の必要がある。

（３）比叡山とその周辺の実地調査
１）調査内容
・具体的には、まず、現有の武覚超『比叡山三塔諸堂沿革史』をもとに、比叡山上の神仏関係建築群の場所の意味を、歴史的変遷に留意しつつ考察する。
・建物と建物との象徴的関係はもとより、ある場所から見える景観に着目して、様々な要因についてＰＣを用いてデータ化する。
・鎮座由来の物語文献や儀式書との関係に留意する。

（４）研究会の開催
１）研究会の内容
・神仏関係思想を研究している研究者との研究交流会・研究会を開催する。
・研究代表者・上原が訪問すること、研究社の招聘も含め、少なくとも２回を予定している。
・研究者：佐藤正英、茨城大学・伊藤聡、神田外語大学・窪田高明、山口大学・柏木寧子など。

○平成１９年度
（１）神仏関係思想の原理的解明
１）研究内容
・山王一実神道の内容とその成立過程を考慮しつつ、主に中世の山王神道における神仏関係思想の原理的解明を行う。本覚思想、伊勢神道、両部神道との関係にも留意する。
・慈遍に関する現存資料を読み解く。『古語類要集』『神皇略文図』『旧事本紀玄義』『天地神祇審鎮要記』、『豊葦原神風記』等である。慈遍の神道思想については、神道史などの領域で多くの先行研究があるので、それらを参考にしつつ研究を深め、神仏一致、神本仏迹の思想に着目し、そこにどのような原理的な展開が見られるのかを解明する。
・『耀天記』を「山王事」以外の部分も含めて読解する。『続群書類従』本を使用する。
・『渓嵐捨葉集』を読解する。中世の山王神道の重要文献であるが、本覚思想、両部神道　説も見られ、それらとの関係に留意しつつ原理的な考察を深める。『大正新脩大蔵経』（第 76 巻）本を使用する。
・『山家要略記』を読解する。『続天台宗全書』本を使用する。
・祝部行丸の『日吉社神道秘密記』（『群書類従』本）、『日吉社神役年中行事』（『日本祭礼行事集成』本）等を読解する。とりわけ、『日吉社神道秘密記』で述べられる鎮座由来の記述を分析し、物語的な知の様態を原理的に考察する。また、仏教側からの神仏関係思想との差異を原理的に解明する。
２）購入資料
・慈遍の現存資料を購入・複写する必要がある。また、山王神道のみならず、中世神道関係の資料・研究書も充実させる必要がある。
・『耀天記』『渓嵐捨葉集』『山家要略記』の上記テキストはもとより、他の写本もできれ　ば手に入れる必要がある。祝部行丸の文献も、翻刻されていない資料も含めて手に入れる必要がある。

（２）日吉大社周辺の実地調査
１）調査内容
・日吉大社を中心とした地域の調査を、境内の古墳群との位置関係にも留意しつつ行う。
・中世期に数多く制作された、「山王宮曼荼羅」等の構図を解析し、神仏の絵画的表現と実際の景観構造との連関を解明する。絵画も、景観を生み出す知と密接に繋がった知の働きから生まれていることを解明する。
・祝部行丸の「山王諸社絵図」（『神道体系日吉』所収）を用いて、中世社殿の位置関係を研究する。
２）購入資料
・比叡山・日吉大社に関する、すべての「山王宮曼荼羅」「垂迹曼荼羅」を手に入れる必要がある。
・日吉大社周辺の考古学的資料（発掘調査報告）も購入の必要がある。

（３）研究会の開催
１８年度と同様に開催し、研究交流を行う。

○平成２０年度
前年度に引き続き、神仏関係思想の原理的研究、実地調査を行い、研究成果を印刷物とし

て公表する。
・具体的には、研究会の開催以外、前年度の研究計画と同様であり、不足している資料の蒐集と不足している研究の継続・発展が課題となる。

４．研究成果
（１）神・仏概念および神仏関係思想における知の様態について
『古事記』に始まる古代の諸文献を読み解き、神・仏概念についての解釈および整理を行った。先行研究における神・仏概念の定義の変遷をも辿った。さらに、仏概念に関して、法華経の語る垂迹概念と密教における法身概念とを軸に考察を行った。いずれの研究においても、神と仏とが交錯する原理的な地点の解明に努めた。
神は、存在を存在たらしめている自然の威力であり、意識からすれば外部の存在である。人々は、神との融合を求めて祭りなどの儀礼を行ったり物語を語ったりした。そこに見られるのは、神の威力を部分的に取り込み融合するというプロセスであり、同時に感覚も変容し、神の痕跡としての具体的事物・事象の感得が可能になる。そして、神との出会いの全的な一回性は、部分的な反復性へと変容する。そのプロセスで働いている知は、具体的な諸事物・諸事象が時間の中で変容して現存するという語りの様式を持つ、時間的・物語的な知である。聖地の景観も、そこでの神との出会いが物語られることによって意味づけられている。
以上の、神と人間との関係様式に仏法が介入する。
仏は諸存在についての絶対知を体得した者の意である。その本質理解（絶対知の様態、境地など）においては、日本人にとって具体性を欠いたものであった。仏に至る過程（修行）の叙述にしても、その意味を十分に理解して行ったかどうか疑わしい。にもかかわらず、多くの日本人にとっての理想となったのである。そして、日本人は、自身の身体を含め、儀礼の道具、経典における文字、読経の音、そして景観など、具体的な諸事物・諸事象の中に、仏の存在に対する実感を求めたと言える。例えば『日本霊異記』に見られるように、従来は神に関する不思議な物語も、仏法的に意味づけることによって、身近に仏法的世界を感得しようとした。このような、具体的な諸事物・諸事象の中に仏の実感を求める知の様態は、上述した神と人との関係様式と類似する。
神に関わる景観に仏法が関係するとき、神は仏の垂迹であるという理論をもとに、神の聖地性が保存される。と同時に、その場所には仏法的な地名が付けられたり、後の垂迹画を生んだりして、場所を指示する言語表現（地名）や視覚表現（絵画）において神仏習合が果たされるのである。
以上、日本の神仏関係思想において、神と人との関係において見られた知の様態が、強力に働いたことが明らかになった。
文字や音に関する具体的な知の様態として、象徴的・類似的・比喩的・同音異義的な附会が、その特徴として挙げられる。例えば、有名な「三王」という文字の説明などである。これらの附会に見られる知の様態も、仏法以前のものである（特に、和歌においてみられる）。

（２）神仏関係思想の原理的解明
和辻哲郎の倫理学大系における隠れた神仏関係理論について考察し、『理想』に発表した。和辻が抱えた特殊（日本）と普遍との関係という問題は、仏教が移入された古代から存在し続けている問題である。古代の普遍概念は仏法であり、神仏関係思想は特殊と普遍とを如何につなげるかという思索を示している。
山王神道もまたその一つであり、特殊と普遍との関係という観点から山王神道における神・仏の概念及び神仏関係の原理を概括的にではあるが辿った。山王神道の神仏関係理論と和辻の神仏関係理論との違いは多いが、原理的な点を言えば、山王神道には垂迹に関する物語（時間性）と比叡山という景観（空間性）が関係しているという点である。

以下、山王神道における神仏関係思想の原理研究についての成果を述べる。
・耀天記』中の「山王事」を読解し、慈遍以前の山王神道の教説的な知、および教説以前（もしくは教説と併存）の物語的な語りにおける知の様態について考察した。あわせて『耀天記』に記述のある諸儀礼のあり方と意味について考察した。これらを通じて、教説・物語・儀礼の３者における、それぞれの知の様態と神仏関係思想との関係を原理的に考察した。
・慈遍の著作では、『旧事本紀玄義』『豊葦原神風和記』を読解した。慈遍は、天地開闢から始まる新しい日本神話を創作しているが、そこに見られる神と仏との関係思想を整理した。そこで主に考察した問題点は、慈遍はどうして神本仏迹へと思想形成を行ったのかという点であり、またそれが倫理思想としてどのような新しい意味を持ったかという点である。手がかりとして『審鎮要記』に見られる「性等神」「覚等神」「邪等神」、あるいは他の書に見られる「法性神」「有覚神」「実迷神」などの神分類の意味を考察し、神仏習合思想の中で神がどのように位置づけられたのかについ

て、歴史的変遷に留意しつつ整理した。
　仏法と神との関係は、日本においては普遍と特殊との関係思想であるが、人間の理知と感性・欲望との関係思想であり、神本仏迹への変容は重要な意味を持つ。
・『山家要略記』（続天台宗全書所収）を読解した。菅原信海「『厳神霊応章』考」（『山王神道の研究』所収）の内容を再検討し、「厳神霊応章」と「三宝住持集」との関係、および成立時期について考察した。その中で特に、最澄までさかのぼる内容があるかどうかについて検討した。
・『渓嵐捨葉集』を読解し、山王神道と本覚思想・両部神道との関係を原理的に考察し、山王神道教説における知の様態を原理的に考察した。
・祝部行丸の『日吉社神道秘密記』などを読解し、神道における物語的な知および日吉神社の景観の役割について、知の様態という観点から考察した。
　景観の役割という点から注目すべきは、行丸「山王二十一社等絵図」である。その中にある「在天北斗、在地山王」の図（および「日吉社再興願文」に見られる絵図、「山王境内惣図」）は、有名な北斗と社との附会を図式化したものであり、日吉社の社殿景観が如何に神仏習合に有効に働いたかが見て取れる。神の威力が部分的・反復的に感受できる神体山は、ここでは北斗の神を感受できる山となって意味づけられている。この絵図を生んだ知の様態は、仏法以前の神の景観を生み出した知と連続性をもちつつも、仏法的な抽象性が加わったものと言えるのである（「日吉社再興願文」絵図部分に見られる社殿位置の抽象性にそれが窺える）。

（３）研究会の開催
・神仏関係思想を研究している研究者との研究交流会・研究会を開催し、成果を発表し、討議を行った。
・毎年、８（９）月と３月に行った。
・研究会の構成員は、以下の通りである。研究代表者・上原、東京大学名誉教授・佐藤正英、山口大学准教授・柏木寧子、静岡県立大学講師・吉田真樹。
　以上、当初の目的の７～８割は達成されたと考えている。
　しかし、以上の研究および研究発表の成果は、多くがレジュメや原稿のままであり、今後逐次公刊して行く予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　１件）

「和辻哲郎と仏教―普遍と特殊をめぐって―」（『理想』677 号）2006 年、52-64 頁.

〔学会発表〕（計　　０件）

〔図書〕（計　　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　０件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
東亜大学・教授・上原雅文

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし